



**ザ・ホールド!**

時間停止して幼なじみ生徒会長と  
立場逆転!!



●一章 金髪生徒会長は、ツンツン幼なじみ！

「まったく、気が利かないんだから！ 朝お迎えに来たら、私が黙っててもカバンを持つようにって教えたでしよう？」

「悪い。忘れてた」

信一の朝は、幼なじみで生徒会長のセシリア・シュタイナーに怒られるところからスタートする。

時は、憂鬱な月曜日の朝。

眠たい目を擦りながら駅まで歩いてきたっていうのに、勘弁して欲しいところだ。

信一がそんなことを考えているとも知らずに、セシリアは、腰に手をあてて、プリプリと怒っていた。

そんなセシリアは、見かけだけでいえば可愛い部類に入るのだろう。

この日本では珍しい金髪を腰まで伸ばし、やや吊り気味の瞳は青空のように澄み渡っている。

プロポーションも日本人離れしていて、制服のブレザーからはおっぱいがこぼれ落ちそうになっていた。

スラッと伸びた脚は黒タイツによって覆われてはいるが、微かに透けてみえる太股は陶器のように白かった。

陶器のように白くはあるけど、そこに触れたらきつとふつくらとして柔らかいことだろう。

（おかげさまで、こうして駅前のロータリーが混んでも、すぐに見つけることができるんだけどな）

日本では珍しい、金髪碧眼の美少女だ。

文句なしに可愛いからこそ、すぐに見つけることができる。見かけだけは可愛いから。黙っていれば、もっと可愛いに違いない。

そして怒っていないければ、もっともっと可愛いことだろう。

そんなセシリアは、カバンをつきだしてきた。

「ほら、カバン、持つ！」

「へいへい。ありがたくセシリア様のカバンを持たせてもらうことにしますよー」

「返事は一回でいいの！」

カバンを押しつけられる。

セシリアが持っていたカバンは思っていた以上に重たかった。

きつと、今日使う教科書が詰まっているのだろう。

かたや信一のカバンは、置き勉しているから軽い。

学園では、信一のように置き勉している生徒のほうが多数派だろう。

セシリアのように毎日教科書を持ち帰って、家でも勉強してる真面目な生徒のほうが少数というものだ。

（そしてその教科書を、俺に持たせなければ文句無しなんだが、なあ……）

「……なにか言ったかしら？」

気がつけば、セシリアはすぐ隣を歩いている。

駅までの短い距離だけど、（見かけだけはいい）セシリアと一緒に歩けるのは幼なじみの特権だと思う。

「いま、失礼なこと、考えてたでしょ」

「い、いや、なにも考えてないぞ」

「ごまかさなくても分かるんだから。どれくらい長い間幼なじみしてると思ってるのよ」

セシリアは、なんの躊躇いもなく腕を組んでくる。

信一の胸がふつくらとして柔らかいもので包まれた。



(相変わらず柔らかい……っ)

信一はこみ上げてくる劣情を、必死になって抑え込む。

毎朝こうして腕を組んでくるけど、そのたびに心拍数が上がる。男なら、無理もないことだと思うけど。

だけど、セシリアはおっぱいがあたっていることに気づいていないらしい。

「ほーら、私が支えてあげないとダメなんだからっ。カバン、落したら承知しないんだからねっ」

「うっ！ おっぱいが……食い込んでくる……」

「はあ、なに言ったかしら？ 聞こえないんだけど」

「い、いえ、なんにも言っていないぞ、うん」

「そう、それならいいけど。それじゃあ早く駅に行きましょう。電車きちゃうから」

「ああ、そうだな」

「ちゃんとエスコートしてよねっ」

やや訝しげな視線で見上げてくるセシリア。

その柔らかな膨らみが、男を戸惑わせているとも知らずに。

ちなみに。

現在のセシリアのプロポーションは、そんなところのグラビアアイドルが素足で逃げ出すような発育具合となっている。

小学生のころはそんなでもなかったけど、中学生辺りから急に大きくなり始めて、今もお成長中だ。

毎朝おっぱいをあてられているのだから分かる。

こうして腕を組んでいると、柔らかな双丘に、腕が包まれる。

もしも。

もしも、だ。

この双丘のあいだに、腕ではなくて、男の象徴を挟み込んだらどうなるだろうか？

信一の二の腕を易々と包み込むほどの包容力なのだ。

きつと簡単に肉棒をサンドイッチすることができるだろう。

(……そんなことを考えてるなんて知られたら、鬼の形相で怒られるに違いないけどな) きっとセシリアがこんなにも無防備なのは、信一と幼なじみだからなのだろう。

セシリアとの出会いはずっと昔……。

五歳のことだった。

ちなみに信一とセシリアはともに高等部の〇年生。

だからセシリアとは、十年以上の月日とともに過ごしてきたことになる。

小学生のころは、セシリアは髪や瞳の色が違っていたから、周りから孤立していたものだ。

だから信一は時間を見つけてはセシリアと遊ぶようになっていた。

それにセシリアの家に遊びに行くと、美味しいお菓子を食べさせてくれる……という、子供っぽい理由もあった。

セシリアの家は、父がイギリス人の貿易商だそうで、瀟洒な洋館を構えている。

大きな鉄扉をくぐればつねに噴水がサラサラとした水音をかなで、靴を履いたまま家に上がると、大きなシャンデリアがお出迎えしてくれる。

だけど、セシリアと会っていた一番の理由は、愛らしい笑顔が見たかったからだ。

あのころは、周りにいた男子たちは、

『女と遊ぶなんてかっこう悪い』

といって、セシリアには誰も近づいてはこなかった。  
そんな男子たちも、思春期を迎えたあたりからだろうか？

今までセシリアを遠巻きに見ているだけだったけど、こぞってセシリアに告白するようになったのだ。

……もつとも、そのすべてが玉砕だったらしいけど。

だけど幼なじみとして忠告しておきたい。

こんな高飛車な女、止めておいたほうがいい、と。

（そういえば、その頃からだったよなあ……セシリアが急にツンツンしはじめたのは）  
今では信一は、毎朝こうして立派な鞆持ちとなっている。

毎朝二人が住んでいる最寄り駅に集合して、それから信一は奴隷のように両手にカバンを持って満員電車で揺られるというわけだ。

（それにしても、無防備すぎないか？）

信一は、二の腕をサンドイッチしてくるおっぱいに戸惑ってしまう。

教えてやるべきなのだろうか？

だけど、もしも教えてやったら、それこそ顔を真っ赤にして怒られそう。

「やだ、こんなに混んでるなんて……っ」

「なんかいつもよりも混んでるなっ」

改札を通って、駅のホームへと上がってみると、そこにはいつもよりも多くの通勤客でごった返していた。

電光掲示板によると、どうやらどこかの路線が止まってしまったらしく、この駅へと人が集中してしまったようだ。

ただどこかで尻込みしているわけにもいかない。

そしてそれも許さんと言わんばかりに、タイミングよく電車がきてしまった。  
どうやら躊躇している暇はなさそう。

「信一、あの電車に乗らないと！」

「分かっている、分かっているが……！」

む、胸が食い込んでくるうう……

思わず、朝のホームで絶叫してしまいそうになった。

それでもなんとか、いつも乗っている電車に乗り込むことができた。

「ううっ、さすがにいつもよりも混んでるわね……」

「あ、ああ、そうだ、な……っ」

なんとか乗り込むことはできたけど、今度はドア付近で寿司詰めになってしまう。

特に身体の小さなセシリアは、ドアと信一の身体に潰されそうになっていた。

「こ、こら……！ もうちょつと離れなさいよ！」

「無理言うな、満員電車なんだぞ。俺の背中にリーマンの身体が当たってるんだ。これ

くらい我慢してくれ」

正確にはリーマンかどうかとも、振り向くことができないから分からない。

それほどまでに電車は混んでいた。

「む、むぎゅう……、く、苦しい……！」

身長が百五十センチほどのセシリアは、苦しげに呻く。

苦しいのは本当なのだろう。

なにしろ……。

（セシリアの胸が、あたって……ううっ、俺の身体で潰れてるぞおお！）

視点をやや下に落とす。

そこで信一は目を疑ってしまった。

（セシリアの胸、こんなに潰れるのか……ううつ、プリンみたいに柔らかくて……、それに呼吸も伝わってきてる……！）

セシリアが呼吸をするたびに、そのかすかな振動が伝わってくる。

それにおっぱいは、まるでプリン……、いや、プリンはこんなに力を入れたら潰れてしまうから……、それはまるでマシュマロのように潰れていた。

その谷間からは、セシリアの汗だろうか？

ほのかに甘い香りが漂ってきている。

「あ、あんまり動かないでっ。そ、その……変な態勢になっちゃってるから……っ」

「ああ、動こうと思っても動けないしな」

こうしておっぱいを押しつけているというのに、セシリアは身体の力を抜いて、体重を預けてくる。

それは男として頼られているということなのだろうか？

ちなみに信一は両手にカバンを持っているから、痴漢をしようと思ってもできない。だからきつと甘く見られているのだろう。うん。

高飛車なセシリアが、そう簡単に気を許してくれるはずがなかった。

☆

こうして満員電車で揺られること、約十分。

信一たちは、学校の最寄り駅に着いた。

同じ制服を着た生徒たちが、満員電車から流れ出していく。

きつと上から見たら、放流される小魚のように見えているに違いなかった。

駅から学校までは、徒歩で約十五分ほど。

ゆつくりと、周りの生徒たちの流れに任せて登校していくと、やがて真つ白な時計台を中心としたお城のような校舎が見えてくる。

聖シュタイナー学園。

名前から予想がつくように、この学園はセシリアの父である、アラン・シュタイナーが私財を投じて運営している私立学園なのだ。

普通の高校では学ぶことができない、より実践的な経営手法や、国際的な社会常識を学ぶことができるにあつて、その生徒はいいところの御曹司やお嬢様であることが多い。

（なぜ、俺がこんないいところの学校に通っているのかという）

それもセシリアが暗躍したからだ。

信一は地元の普通科高校への内定が決まっていたのだけど、なぜかセシリア直々に推薦状を持ってきて、適当な面接を受けさせられて、そして今に至るというわけだ。なぜこうなったし。

（まあ……今になって考えてみたら……）

信一は、両手に持ったカバンを見ながら思う。

（セシリアが俺のことを、奴隷としてこき使うために入学させたんだろうけどな）  
昇降口で上履きに穿き替えて、こうして信一たちが向かうのは教室ではない。

生徒会室だ。

セシリアは高校〇年生にして、聖シュタイナー学園の生徒会長を務めているのだ。



学園理事長の娘の一人娘であるセシリアは、生徒からの人望も厚く、二位以下にダブルスコアをつけての圧勝で生徒会長に就任した。

そして圧倒的なハイスペックゆえに、会計や書記など必要としない状況となっている。ただ、雑務である信一を除いては。

だがそれは、ありのままに言ってしまうえば、奴隷のようにこき使われているといったほうが近いかもしれない。

そんな信一の思いも知らず、セシリアはやる気満々のようだ。

「さあ、各部活動からの予算申請がきてたわよね。パッと処理しないとね」生徒会室のクジラのように大きな机。

その胴体の部分にあたる席に腰掛けると、セシリアはさっそく書類に目を通しはじめる。

そして目にも止まらぬ早さで、書類にハンコを捺したり、弾いていたりする。ときには電卓を叩いて修正したりと大忙しだ。

相変わらず、ハイスペックな仕事ぶりだ。

（俺にできることといえば、セシリアにお茶を入れることくらいだけだよなー）生徒会雑務として、一日で最初の仕事。

それはセシリアに紅茶を入れることだ。

鞆持ちも仕事のうちに入りそうな気もするけど、それはあくまでも幼なじみに尻を敷かれているからということでノーカウント。

「セシリアが好きなお茶は……、今日は夏にしては涼しかったし、それに風も爽やかだったから、さっぱりした紅茶がいいだろうな」

セシリアの紅茶を毎日淹れているのだ。

その日の体調や天気によって、セシリアの飲みたい紅茶を考えることも信一の大切な仕事だった。

ティーポットに茶葉を入れ、それからお湯を注いでいっちゃ出来上がりだ。

「はい、紅茶が入ったぞ」

「ありがとう」

さっそくティーカップに口をつけるセシリア。

その眉間に、深いしわが刻まれた。

「ちよっと、ぬるいわよ？　こんなにぬるかったら、紅茶の味が楽しめないじゃないの。

紅茶を淹れるときの適正温度は——」

（ああ、また始まったぞ……）

信一は、内心辟易していた。

ちよっとでも気に入らないことがあったら、すぐにお説教モードだ。

こんなに性格が悪いのに、よくもまあ、生徒会長選挙で圧勝できたものだと思う。

だけどそれにも理由があつて。

（俺と二人きりのときなんだよなあ、こんなにツンツンして不機嫌そうにしているのは、勘弁して欲しいぜ）

セシリアは、貿易商であり実業家の父であるアラン・シュタイナーの一人娘であり、一言でいってしまうえばお嬢様ということになる。

だがそのことを鼻にかけることなく、常に全力で物事に取り組む姿は、生徒から高い人気を得ていた。

成績は常に学年のトップ。

部活動のヘルプに呼ばれればトロフィーまで持ってくる運動神経だ。

理事長室の前に並んでいるトロフィーの半分以上はセシリアの功績ではないだろうか。

文武両道を地で行くセシリアは、生徒からだけではなく教師からも厚く信頼されていた。

だが、信一は思うのだ。

（みんな、騙されちゃいけない）

と。

柔和な笑みを浮かべているセシリアは猫をかぶっているだけだ。

こうして信一と二人きりになったとたんに、ツンツンモードが発動する。

「紅茶に関しては、明日から気をつけるようにね。それと目安箱のチェックをお願いできるかしら。あとは……、西棟の電球がそろそろ切れそうになってたから交換もお願いね」

「あ、ああ……」

ちなみに、目安箱は東棟にある。

ということは、朝からこのアホみたいに広い校舎を横断しなければいけないということだ。

ちなみにこの聖シュタイナー学園の広さは東京ドーム五個分くらいはあったと記憶している。

（やれやれ、朝から奴隷みたいにこき使ってくれるぜ……）

それでもセシリアにしか書類整理ができないから、信一は言われるがままに使われることしかできないのだけだ。

生徒会雑務なんていう肩書きは名ばかりで、実際にはセシリアの奴隷といったほうが正鵠を得ている。

だけど、生徒会長であるセシリアには逆らうことは許されないのだ。

もしもセシリアがへそを曲げて、仕事を丸投げでもしたら、この学園の中枢が麻痺するといっても過言ではない。

さすがにそれはまずすぎる。

（ここは我慢だぞ、俺……！）

信一は沸き上がってくる怒りを堪えつつ、生徒会雑務としての仕事に励むのだった。

☆

こうして朝の仕事を済ませたところになると、ちょうどチャイムが鳴り響いた。

登校してきて一仕事したあとだっていうのに、これから授業だと考えただけでも気が重たくなってくる。

「さあ、教室に行くわよ。カバン、ちゃんと持ってね」

「ああ」

短く返事をして、両手にカバン。

朝から校舎を横断してきた身体が、ずっしりと重たい。

それに。

重たいのは身体だけではなかった。

（これからセシリアと一緒にのクラスで授業だなんて……。考えただけで、気分が滅入っ

てくるぞ……」

そう。

信一とセシリアは、この学園に入ってから同じクラスになっていたのだ。

もしかしたら、セシリアがお嬢様特権で、奴隷である信一と同じクラスになるために操作したのかもしれない。

……それも、今となっては闇の中だけど。

「やれやれ、ぜんぜん気が抜けないぞ……」

「なにか言ったかしら？」

「いや、なにも言っていないぞ」

生徒会室を出て、セシリアの背中を追いかける。

両手にカバンを持っているから、自然と猫背になってしまっている。

セシリアの背筋はピンと伸びていて美しかった。

それに生まれながらのブロンドが朝日に輝いて眩しくもある。

「おはようございます、セシリアさん！」

「おはよう」

「ごきげんよう、生徒会長」

「ご機嫌麗しゅう」

セシリアが廊下を歩けば、すれ違う生徒たちがこぞって挨拶してくる。

その挨拶ごとに、笑顔で応じるセシリア。

（みんな騙されてる、この笑顔に騙されてるぞ……！）

金魚の糞のように、後ろからついてくる信一は思わず叫びそうになってしまう。

だけどそんな度胸もあるはずがなくて。

しかも、もしもここでセシリアの本性を暴こうと思っても、誰も信一が言っていることを信じるはずがなかった。

それほどに、セシリアはみんなから信頼されているのだ。

「おはよう、おはよう……」

こうして挨拶のすべてに応えているところを見ると、生粋のお嬢様なのだなあ、とは思うけど……。

（もうちょつと俺に対しても優しくしてくれたら嬉しいんだけど、なあ……）

信一は、そんなことを考えながら、セシリアの華奢な背中を追いかける。

夏の日差しを孕んだそよ風にスカートの裾が踊り、黒タイツに覆われた太股の付け根が、一瞬だけ見えそうになり……結局は見えなかった。

（……って、俺はセシリアのパンチラなんて見ても、断じて嬉しくなんかないんだぞ。なに目を細めてるんだ……！）

首を左右に振って、邪念を振り払う。

だが、このとき信一が知るはずがなかった。

セシリアのショーツが、すでに蒸れているということに。

クロッチが食い込み、甘い香りを漂わせていることに……。